巻頭コラム

遂に「Bリーグ」が始まった

日本における二十歳以下の若年層のスポーツ人口は一位がサッカー、二位は野球を抜いてバスケットボールになった。世界で最も競技人口が多いのがバスケットボールなのは意外に知られていない。そして、遂に日本でもプロバスケットボールリーグ「Bリーグ」が開幕した。小学校から高校まで八年間のバスケットボール経験から、リーダーについて思い出したことを話したい。

小学校五年生のとき、近所の友達から「バスケット部に入らないか」と誘われ、あまり考えずに入部した。顧問の鎌田先生は「練習は真剣に、チームワークを大切にする」という方針のもと、部活中はとても厳しかったが、上級生も下級生もほとんど辞めなかった。時折、練習や試合が終わった後に、アイスやお菓子をご馳走してくれるのを楽しみにもしていた。鎌田先生の人柄についていった。

むつ中学校に進学するも、バスケ部が無かったので、バスケ部を創ることにした。そこに当時の名門の拓殖大学で名ガードだった関コーチが就任した。一年生だけでの公式戦。初戦は女子の半袖のユニフォームを借りて試合に出た。ユニフォームを買う予算が無かったのだ。中学校一年生で背も低い五人が女子のユニフォームを着て、センターコートに立ったとき、会場は大爆笑だった。あの光景は、今思い出しても赤面する。そして、結果は一二〇対十二で大敗北。でも関コーチからは「三年生になったら、経験や実力の差で県チャンピオンになれる」と励まされた。

できたばかりのバスケ部では、体育館も使えず、校舎裏の片隅に屋外コートを作った。練習は土の地面の小石を拾うところから始まった。それでも、ボールは常にイレギュラーバウンドした。自然とボールハンドリングが正確になり、さらにドリブルに頼り過ぎず、パス中心の攻撃を磨いた。本当に土埃まみれの練習だった。

関コーチのリーダーシップの下、これを乗り越えれば勝てると信じて、厳しい練習に明け暮れた。体力、走力、チームワークは青森県一と言えるぐらいになった。そして、三年生では、優勝チームに肉薄するほどになり、青森県大会三位の好成績を収めた。劣悪な環境は実力をつけるのにもってこいなのだと改めて感じる。

中学校のメンバーのほとんどが同じ高校に進学した。コーチは二十六歳、日大出身の丸コーチだった。明るさもなく、常にイライラしていたので、メンバーとのコミュニケーションはギクシャクしていた。言葉にも温かみが無かったと思う。高校に関コーチが来てくれたのだが、丸コーチと意見が合わず、二人が違うことを言うので、どちらの言うことを聞けば良いかわからなくなった。言われたことに必死になって食らいついていったが、下北地区では圧勝するも、県大会レベルでは、なかなか勝てず、ベスト16止まりだった。当時のキャプテンと丸コーチは、いまも時々飲むそうだ。「あのメンバーは全国レベルだった。俺の力不足だった。申し訳ない」と本音を漏らすのだという。小学校の鎌田先生、中学校の関コーチとは、リーダーとしての差があったのだが、振り返ってみれば、若く経験が少なかったのだと思う。

高い成果を目指すなら、練習が厳しくて当然。どんな状況でも言い訳せずに、何ができるのかを考え、必死にやっていくことは、中学生、高校生でも理解している。

そして、メンバーは必死になっているからこそ、リーダーの実力が重要だ。世界観を明確にし、チームメンバーから信頼を勝ち取る。全てはリーダーで決まるのだ。

(株)キャリアコンサルティング 代表取締役社長
Murodate Isao **室舘 勲**

1971年青森県に生まれる。2003年株式会社キャリアコンサルティングを設立。2007年ブータン王国王立マネジメント大学にて講演。就活支援「プレミアムスタイル」は2016年4月入社の内定率99.22%を達成。著書に『夢を見て　夢を叶えて　夢になる』(致知出版社)、『まずは上司を勝たせなさい』(講談社)、『仕事で結果を出す人の頭の中』(しののめ出版)がある。